
裏庭

保地葉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏庭

【Nコード】

N1197F

【作者名】

保地葉

【あらすじ】

父親に課せられた賠償金を支払う為に実入りだけはいいアルバイトをすることにした僕。街角に立ち、現れた客と一晚を過ごす、ただそれだけのバイトである。（とてもゆっくり更新しています。同性の表現がありますが、異性間に置き換えられなかった為です。事前に了承ください）

裏庭、一（街角）

一、街角

仲介役の女はこぢんまりとしたブティックを営んでいた。常連客にはマダムと呼ばれているが、本名は知らない。

マダムは入ってきた僕を遠慮なく品定めすると、ゆったりとした手つきで奥へ招いた。奥の間はドレスアップルームになっているらしく、僕は見たこともない大きな鏡が並び、中央に脚長のスツールが二脚、脇に色とりどりの化粧品が詰まったワゴンが置かれていた。頭部のないトルソーが着ている服を示され、着替えるよう言い残しマダムは消えた。

僕はこれからの副業を思い溜め息をつきながら、上着に手をかけた。

僕は今時珍しくはない苦学生だったが、父親の失職とともに始まった裁判の判決がつい最近下り、その、無職であり今後も職を得る機会はないだろう父親に科せられた賠償金を支払うために、副業をすることになった。

勿論、本業は学生だ。学費が苦しくとも学生でありたい、と願うのは僕の僅かながらに残ったプライドである。

学生バイトではとても足りない、家族の生活費プラス自分の学費、そして賠償金のために結果頼ったのは、腐れ縁の悪友が紹介してくれた、実入りだけはいいい仕事だった。

チュニツク・ワンピースは男にしては細いが女の子のように華奢でも肉付きもよくない肩回り、腰つき、胸板を隠してくれる。用意された長いレギンスを履けばそこそこ筋肉の付いた脚もごまかせた。くるり、と鏡の前で一人回ってみたところにマダムがコーヒーカー

ブを二客揃えて入ってきた。

二人スツールに座り、マダムが化粧ケープを僕に巻く。慣れない甘い香料とコーヒーの匂いが混じりあい、僕の鼻をついた。

そして僕はマダムから受け取った鍵を見て、再び溜め息をつく。

駅前の百貨店のコインロッカーの鍵だ。鍵本体に刻まれたナンバーと扉のナンバーを照らし合わせ、差し込んだ。

かちり、と回りロックが解除される。中に入っていた薄水色のストールを手に取り、思わず握りしめた。

これを首に巻き、百貨店の外壁にあるからくり大時計の下に立てば迎えがくる手はずになっている、という。

そしてその先で一晩過ごせばいい。

簡単な仕事だ。

服装と化粧のおかげで僕は女の子にしか見えないだろう。マダムの見立てと腕は確かだった。

思わず舐めた唇のぬっとりとして微かに甘いグロスの味に眉をしかめつつ、僕は大時計に向かった。

覚悟は決めたのだ。わずかなプライドを守る以外に、失うものなどない。

そして僕は街角に立つ。

裏庭、二（薄水色の客）

二、薄水色の客

案内された場所は、一目で金持ちだと分かるお屋敷だった。スモークの張られた車に揺られ、どれくらい走ったのだろうか。薄暗かった車内から外に出たとたんの西日に目を覆いつつ、視界に入りきらない屋敷を確認した。

このような仕事なのだから、客は裕福であろうことは予想していたものの、目の当たりにすれば驚いてしまう。

僕を迎えに出た案内役は、広い玄関ホールを足早に抜け奥へ奥へと先導する。高価だろう調度品が目の端を通ったが、じっくり見る余裕などないようだった。

待ち合わせ場所の定番になっているからくり大時計の下に立ち、巻き方がわからないストールを首にかけた。マダムに教わってくるべきだったのかもしれない。視線を投げかける通行人が僕を奇異に思っていないか、伏し目がちになってしまう。

どれだけでも待たされただろうか。黒革靴が止まり、僕の手を取った。彼が案内役だった。

客、つまり僕の買い手ある主は、中庭に面した部屋の、キングサイズベッドに横たわり目を閉じていた。

案内役の彼はベッドの脇に長椅子を寄せ、クッションを幾つか敷き僕に座るよう促した。僕は黙って従いしかし何をすべきかを視線で問うてみる。

「あなたは、主のそばにいてくださればいいのです。主が目覚ま

したらそつと手を握って差し上げてください。

ただし、一言も話さず。何か尋ねられてもただ微笑むだけでよいのです」

それだけを言い残し彼は部屋を出て行った。僕は仕方なく長椅子のクッションに体をうずめた。慣れない女靴も脱いでしまう。

客はベッドの上で身じろぎもしない。規則正しく胸が上下するから眠っているのだろう。顔に刻まれた皺は深く、しかし柔らかい。豊かな白髪にいくつか金と銀が混じっているように見えるのは月明かりのせいかもしれない。

長椅子の背には薄水色の掛け布があった。少しだけ肌寒さを感じた僕は、首のストールをぐるぐると巻きつけ、掛け布を羽織る。

客である買い手が指定した装いで一晩過ごす、というこの仕事はそういう行為があるものだと思像していたのだが。

横たわる老人と言ってよい客を見ているうちに、僕は緩やかなまどろみに落ちていった。

裏庭、三（夜半）

三、夜半

目が覚めた。僕を起こした風は開け放した窓から忍び込んだものだった。膝を抱え、本格的に寝入る体制に無意識になっていたことに気づき、掛け布の下でそつと衣服を整えた。

視線。ベッドの老人がじつと僕を見ている。
僕はどきりとはやる息を抑え、ベッドに歩み寄る。彼の手を取り、そつと握った。

脂気の少ない、枯れ枝に似た手だ。

骨にしっかりと吸い付き、皮下脂肪の存在を感じさせない皮、それに住み着くしみ、太さはあるのにとてもし軽い骨、赤に青に浮いた血管がところどころ破けて広がる鬱血、そして痣。

彼の死期はとても近いのかもしれない。
漠然とそう感じた。

「…る、」

かさついた薄い唇が何かを吐き出した。
そしてもう一度、

「かおる、こ」

と。

僕は言い付けの通り、ただ微笑み、彼の手を握り続けた。

「…ああ、ああ」

言葉とも吐息とも判別つかない声を上げ彼は力無く僕を抱きしめる。枯れ枝の指が僕の髪を梳き、背をなぜる。

彼が僕をだれと混同しているのか、恐らく、かおるこ、という人なのだろうが、知らないその人に僕は微かに、…嫉妬をした。

僕はこのように慈しまれ抱き締められたことなど、記憶にない。

享樂的な父親と彼に逆らわない内向的な母親、見たことのない家を出た兄、養子に出された弟という家庭で育ち、時に僕は父親の娯樂費を生み出すために幾度となく売られたことがある。

その買い手たちも僕を商品としか扱わず、このように、優しく抱き締めたことなど、ない。

僕は老人が再び寝入るまでされるがままになっていた。かさついた指先がどこをなぞろうと、体臭にどこか死を感じようとも。

そして眠ったあとは彼の手を握り続け、時折、こもりうたを歌いながら夜明けを待った。

裏庭、四（車にて）

四、車にて

再び目覚めたとき、僕は車の後部座席にシートベルトを締めずに横たわっていた。

彼の手を握り夜明けを待っていたことは覚えている。空が白み、肌寒さを改めて感じた辺りから記憶がない。

僕は眠ってしまったのだろう。スモークガラスのせいで今がいつかも分からないが、時折聞こえる外の音から朝であることは予想がついた。

誰が僕を運んだのだろうか。起こしてくれればいいのに、とシートに深く座り直し、ベルトを締めた。体にぴったりとしていないワンピースはやはり違和感がある、と思ったときあの薄水色のストールを巻いていないことに気づいた。

忘れてきたのだろうか。

それでもいいのだ、あのストールは元々依頼主のものなのだし、夜が開ければその場で返すように、と仲介役のマダムには言いつけられていたのだから。

車が止まり、しばらくして扉が外から開かれた。眩しさに目が慣れず、何度かまばたきを繰り返すと、そこが待ち合わせになった百貨店のからくり時計の前だと分かった。

しわのついたワンピースを軽く伸ばし、扉を開けてくれた男に頭を下げる。予想通り、そこに立っていたのは案内役の彼だった。

彼はあのとちょうど同じように僕の手をとり、からくり時計の下へ連れ

て行つた。そして何も言わずきびすを返す彼の背中に僕は声をかけた。

「あの、…ストールを忘れてしまつたんです」

彼は踊るような仕草で振り向き、昨日と同じ落ち着いた声で言った。

「ストールは旦那様にお返ししました」

「そうですか。…では、僕を車に運んだのは、あなたですか」

「はい」

「起こしてくだされば、よかつたんですが」

「失礼、旦那様もきみも、よく眠つてらしたので」

それだけ言つて彼は車に乗り込み、躊躇なく発進した。

彼の僕への呼称が昨日の、あなた、から、きみ、へ変わったことに気づき、僕はこの仕事が終わつたことを認識した。

そして、僕はこの違和感しかない格好から逃れるためにマダムの店へ急いだ。

僕は思っていた。

あの薄水色のストールを返すときは、あの老人の首に僕の手で巻いてあげたかつた。

細くしみの付いた枯れ枝のような首に柔らかなストールを巻き、そして、…少しだけ息を止めたかつたのだ。

裏庭、五（朱鷺色の客）

五、朱鷺色の客

僕は両手を広げたほどの円卓の前に座った。白いテーブルクロスだと思ったが、よく見るとクリームいろの生地に白糸で細かな刺繍が施してあった。

蔦が葉に、葉から蔦を通じ蝶に、そして尾長鳥、太陽に似た花へと繋がっ刺されている。

指先で伝っていると、正面に誰かが座った気配がした。この卓には椅子が二脚しか添えられていない。とすれば、正面に座った人が僕の今日の客である。

白の開襟シャツに黒のしつかり折り目の付いたスラックスという、学生服のような組み合わせを指定された。もちろん、今回は化粧をすることもなく、履き慣れなくはあるが男用の革靴を用意された。装いからあの薄水色の客ではないことが想像ついたけれど、マダムはやはりどんな客かを教えてくれない。

受け取った鍵で開けたコインロッカーには朱鷺色のストールが入っていた。

悪目立ちしそうな組み合わせだが、今回はマダムに事前に聞いたとおりストールを巻いた。

からくり時計の下にはやはりたくさん待ち人がいて、それに紛れ込もうとした途端に腕を引かれた。

「マダムのところ、」

驚きながらも問いに頷くと、そのまま腕を引かれ車に押し込まれた。助手席であることにまた驚いたが、この車には後部座席がないらしい。赤のオープンカーだった。

ベルト締めて、と促した彼はとても若く、下手すれば学生ともれた。ジーンズに細身のシャツの重ね着という格好である。依頼主なのか案内役なのか、考える間もなく猛発進した車は縫うように走り、ぐんぐんとスピードを上げた。

それでも相当の距離を行き、山道を登ってから降りるよう指示された。目の前にあるのはポストカードにありそうな洋館だった。

そして僕の前に座ったのは、揃いのスーツに着替えた運転席の彼だった。同時にミネラルウォーターの注がれたグラスが運ばれ、朱鷺色の客との夕食が始まった。

裏庭、六（乾杯）

六、乾杯

夕食は前菜から始まる本格的なものだった。どうにかナプキンを膝に置くことに成功したが、並べられたフォークやナイフの多さに、僕はこのような食事マナーを全く知らないのだと、正直に明かした。

「マナーなど気にしないでいいから、きみのし易いように食べればいい」

「でも、それでは拵えてくださる方に悪いですし、…あなたにもご迷惑をかけてしまいます」

「ふむ、…きみが気にするならばマナーを教えようか」

「よろしいんですか」

「いいとも。と言っても俺も正確じゃないと思うけどね。マナー教室のように教えられるが、とりあえず俺の真似をしてみても、できる範囲で」

「はい」

僕は彼を鏡のように見て、同じフォークをとった。

「ワインは飲める？」

「少しなら。…安物しか飲んだことがありませんが」

「最高級とはいかないけど、好きな銘柄なんだ。フルボトルを空けるの、手伝ってね」

「…できる範囲で、ですが」

「うん、それでいい」

彼は満足げに笑い、うつかりしていたよ、とフォークを置きワイングラスに持ち替えた。僕もそれに習い、ふたつのグラスをがち合わせる。乾杯、と彼が言った。

裏庭、七（酔い）

七、酔い

彼がコーヒーを選び、僕は紅茶を選んだ。飲み慣れないワインがくるりと僕の視界を回したかのように、世界がふわふわしている。甘さを抑えたチョコレートケーキを口に入れただけで幸せだった。

「きみは、本当に美味しそうに食べるね」

「本当に美味しいからです。僕はこんな料理を食べれるような人間じゃないから」

「学生だから？」

「…も、ありますけど」

マダムに言いつけられた約束事では自分の身分や立場を明かすことは控えたほうがよかったように思う。自己責任の範囲で客と親密になるのは構わないそうだが、それでも僕はどうも客に対して自分と話す気はなかった。だけれども、彼には話してもいいかもしれないと思ってしまったのは、僕の中に入ったアルコールのせいだろう。

「経済的事情で食事なんて一日一食か二食だから、こんなに立派な料理を食べたことないんです」

「ああ、だから少食なのか。食べ盛りにしては随分と遠慮する子だ

「思っていたんだ」

彼の言うとおり、前菜は食べられたものの主菜に至っては残してしまっていた。ゆつくりとしたコース料理は一品一皿に盛られている量は少ないものの、味付けが濃く美味しいことに変わりはないが食べきれない。それでも気づくか気づかないかの差で僕に給仕される皿は彼より一回り小さく、それを僕の数倍のペースで飲み食べるものだからつられるように口当たりのいいワインが進んでしまったらしい。

紅茶の熱さがアルコールで痺れた脳をじいんと流していく。めったに食べることがないが好物のチョコレートケーキはたいらげたいと、胃を少しでも空けるために背筋を伸ばした。

「何か、」

彼がじつとこちらを見つめていることに気づき、何か粗相をしたのかと問うてみる。主菜を残したのだからデザートも残すのがマナーだろうか。

しかし彼は僕へ指先を伸ばし、その親指で右唇の端を拭って言った。

「ん。一生懸命で、かわいいな、と」

彼は親指に付いたチョコレートをべろりと舐めた。

ナプキンで拭けばいいのに、いや、ついていると指摘してくれればいいのだ。嘗めとることはないじゃないか。

待ち合わせで会ったときの突然腕を掴まれた乱暴さとは打って変わった彼の仕草に、僕は醒め始めていたアルコールが一気に体を巡ったのを感じた。

くらくらと視界が回る。アルコールが僕を僕でなく饒舌にさせる。

身の置き所に困るくらい体が熱くなる。

僕は、彼に問われることを、問われないことを喋った。話すことでこの酔いをどこかへやってしまいたかった。この、逃げ出したいほどに持て余した酔いを。

裏庭、八（兄弟）

八、兄弟

僕には兄の記憶はない。

前の家を引き払うことになった際、押し入れの隅に黴びたブランケットと古いアルバムの間に挟まっていた母子手帳の記録を見るに、僕が生まれたとき兄は十五だった。

アルバムには端が黄ばんだ赤ん坊の写真がきれいに貼られていて、僕は兄の母子手帳と兄であろう赤ん坊のアルバムを私物の鞆に押し込んだ。

養子に出した弟の写真と共に。

弟が生まれたとき僕は二つか三つだった。最後の家族写真を撮り、その後の行方は知らない。

僕の記憶も薄れていたが、現像されていないフィルムを見つけ、焼き上がったそれを見たとき、僕は弟のことをはっきりと思い出したのだ。

父と母が僕を捨てなかった理由は分からない。

僕は幼い頃から自分でも手のかからないこどもだということは気づいていた。泣いた記憶もほとんどない。古い写真だと女の子のようにも見えるから、父はそれを利用するつもりで手元に置いているのかもしれない。

実際、僕は何度となく売られたのだから。

僕は何に飢えていたのだろう。何を求めているのだろう。

優しい彼の手を感じる度に、次から次に涙が零れ落ちる。

痛いかな、と訊かれて首を振った。声を出せば決壊してしまうと思った。

僕の中にある感情の堰に、ひびが入りかけている。
この涙は何と言うのだろう。何と呼ぶのだろう。

朱鷺色の彼が浸食してくる。忘れてしまいたかったものが流れてくる。

怖いか、と訊かれて首を振った。違う、そうじゃないんです、ただ声は出なかった。

こんな行為は初めてではないから、怖いわけではない。
快樂も追うことができる、僕は、逃げ方を知っている。

僕は呻いた。

僕は喘いだ。

息をするために、すべての考えをどこかへやってしまったために。

だけれども彼は真綿でくるむように僕の逃げ道を塞いでしまった。
息苦しさに柔らかさに揺さぶられながら、体も意識も弾け飛ぶまで僕はただ鳴き続けていた。

裏庭、九（落葉色の夢）

九、落葉色の夢

ショーウィンドウに飾られているようだ。豪奢に着飾り、季節を先に取る。

自分の形を見いだせない。ただ立っているだけ、ポージングを決め、何もかも楽しんでいるかのように魅せる。本当は何もかも捨ててしまいたいのに。

衝動に甘んじて自分を甘やかしてどうにでもなればいいと思った。消えていく感情は大人になった証だと信じていたあの頃に戻りたかった。

もう行き交う日常はとり戻せない。手が届かない。俺と彼らの間には分厚く薄汚れたガラスがある。自分はそのまま飾られたショーウィンドウでさらし者のまま死ぬのだ。そんな妄想に支配されていた頃。

仲介屋の噂を聞いた。

何が欲しいの、とマダムは言った。

「ここには服飾品かお金か人肌しかないわ。あなたは、何が欲しいの」

「人肌」

迷わず答えてから、自分がそれに飢えていたことに気づいた。そしてそれが欲しくて欲しくて欲しくて欲しくてたまらなかったように思った。

「人肌を金で買うことができて、あなたの望むとおりになるとは限らないわよ。それでも、」

「それでも人肌が欲しい。俺のために存在するそれが欲しい。例えば一晩でも」

初めての渴望だった。

マダムは微笑み、言った。

「では、あなたに色をあげるわ。あなたに貸し出す人肌の目印に。あなたの欲しがるものをあげる、けれど、あなたはおそらく、失うことになるでしょうよ」

「何を、」

「一番大切なものを」

「金？金ならいくら失っても構わない」

首を振り、マダムはタバコの煙りを吹きかけた。

「悲しいわね」

その言葉の意味が俺にはわからない。

裏庭、十（蝶花）

十、間奏（蝶花）

蝶よ花よと愛しいこの子、
砂糖菓子をお食べなさい、
羽毛の寢床を拵えましょう。

この庭だけがわたしの住処です。
この庭からは出られません。
飢えております。 飢えまする。
光に水に土すら存分にありますのに。

あねさま人形飾りましょう。
あにさま人形飾りましょう。
あかこの人形縫いましょう。

揺すり揺すられ夢のなか。
どちらが現か極楽か。

困い困まれた裏庭の享樂だけを追いましょか。

呼び声は水琴窟の鈴の音、
語る言葉は野を駆け巡る風、
蝶よ花よと愛しきこの子。

求める夢は如何なものか。
望んだ現は如何なものか。

裏庭、十一（日常）

十一、日常

母が居なければ僕は産まれて来なかった。
父が居なければ僕は生まれて来なかった。
だから思う。

母も父も居なければよかったのに、と。

マダムの店に通う日々が続き、昼休みに図書館で足りない睡眠を補う毎日になっている。講義の最中に眠ってしまいそうになるが、バイトをしている理由を考えるとそうはいかない。

朝食にはバナナを一本、昼食代わりにチョコレートをつたかけ、夕食は大抵仕事先で取ることになる。

昨夜の客の勧めるままに飲んだアルコールが残った頭はぼんやりと霞む上に気を抜くと痛みが走る。話し相手になり一晩飲み明かすという客の希望は、楽なほうではあったのだけれど翌日が辛い。

定位置となっている日の当たらない閲覧机に突っ伏していると、誰かが空いている向かい側に座った気配がした。

動く気になれずそのまま寝入ろうとすると、座った気配が僕の頭に手を伸ばし、髪を梳くように撫でてきた。それによろやく顔を上げると、座っていたのは彼だった。

腐れ縁の悪友、僕にこのバイトを紹介した男である。

「食べてるのか、」

「…食べてるよ」

「嘘、顔色悪いぞ」

溜め息混じりに彼は僕に栄養剤のタブレットをくれた。とんでもない偏食の友人は気休めにと栄養剤を常にもち歩いている。ミネラルウォーターのボトルも差し出され、僕は遠慮なく水を飲んだ。

「顔色悪いのは生まれつき。なあ、二日酔いの薬は持ってない？」

「莫迦か、俺は下戸だ」

「そうだったっけ」

貰った代わりにと、安売りのチョコレートの包みを幾つか彼に渡し、自分でもひとつ口に入れた。甘みが残っている間にタブレットを含み、ミネラルウォーターで流し込んだ。

時計を確認すると昼休みはまだ半分は残っている。その上、次のコマは休講になっていた。

「ごめん、寝せて」

返事も聞かず再び突っ伏した。

腐れ縁の悪友だが、気の置けない間柄は心地良くもある。カサカサとチョコレートの包みを開く音と、カカオの香り。指先が僕の髪に触れ、頭皮まで梳くようにとかしはじめる。

夢の入り口は近く、僕は直ぐに微睡み出す。

友人が何か言ったようだったけれど、僕の耳には届かなかった。

眠れば眠るほど、いつか目覚めなければなくなる。

裏庭、十二（薄墨色の客）

十二、薄墨色の客

背格好の為か女の装いをすることが多い。仕事として割り切っているから意義はない。しかしそれでも、これは、と僕は鏡の中の自分を見て思った。

ノースリーブのワンピースに薄手のニットカーディガン、艶消しされた革靴、オーバーニーの靴下、そのどれもが沈むような黒だった。これでは、まるで喪服ではないか。

直毛のウィッグにベルベットのリボンを結わえる。せめてフリルがついていればゴシックな装いになるだろうが、ワンピースにはボリウムがなく、ニットカーディガンが蔦模様が透かし編まれているのが唯一の飾り気だった。

白菊でも持ってやろうか、と考えながら向かった百貨店のコインロッカーには、予想通りというか薄墨色のストールが入っていた。

黒に鈍色、と悪目立ちする組み合わせでからくり大時計の下に立つ。葬式にでも連れて行かれたらどうしよう、と考えていた。僕はそういうもののしきたりも、何も知らないのだ。

ふと、待ち人がひしめく通りの空間が割れた。待ち人たちは明らかに喪服の僕を遠巻きにしていたが、その割れた空間は徐々に近づいてきた。

街人は晴れ着と喪服には近づかず、視線を送るものだ。僕の前に立った客はやはりブラックスーツにブラクタイで、だからシルバーフレームの似合う形なのだが、レンズに色の入った眼鏡が浮いていた。

僕は促されるままに彼に続く。薄墨色の客は待たせていたらしいタ

クシーに乗り込むと、とある墓地の名を告げた。

葬儀場でないことに僕は内心ほっとしていた。墓参りか、と隣の男を見上げ、男の眼鏡の奥の瞳の色素が随分と薄いことに気づく。目が弱いのか。

色素が薄いと光に弱いと聞いたことはある。それとも、瞳の薄さを隠すための色つきレンズなのかもしれない。

つい見つめてしまっていた僕に気づいた彼が僕の右手を取る。そして何を思ったのか僕の右の小指と彼の左の小指を絡めた。それはまるでというか、明らかに指切りの形で。

タクシーは僕の混乱にも構わず滑るように走り抜けていく。

裏庭、十三（針）

十三、針

墓地に着いても彼の指は約束の形のまま離れなかった。降りるよう促され、砂利道を踏んだ。

夕暮れの墓地は初めてだ。彼は街灯がなく足元は夜になりつつある墓地を、迷うことなく進んでいく。

区画で整備されているはずなのに、どうして墓地は入り組んでいるのだろう。

遠い記憶で父と母と三人で行った墓参りも迷路のようだった。

花束を持ち、水場へ寄る母を待たずたと先を行く父。小高い丘に造られた墓地の坂は急で僕は走っても父に追いつけず、母を探してもその姿は見えない。そうこうしているうちにふいに父の背中も消える。

ざわざわと松林だけが囁き、そこかしこから線香の煙りがするのだから人がいるはずなのに、誰にもすれ違わない。動く影を見つけたと思えば烏で、ぎろりと睨んだ黒の目に怯む。

がくがく震える膝で這うように坂道を登る。どこかを右に折れたところにある墓があり、そこに父と母はいるはずで。だけれども同じように連連と続くのは墓石だけで人影はないのだ。父も母も消えてしまっていた。

僕は坂を登るのをやめ、下り始める。下りきったところにある朽ちかけた東屋を見つけ、そこが出口であるかのように全力で走った。

夕暮れの墓地は静かで、記憶の墓地のように坂道はない、平坦な場

所だった。僕たちは小指を絡ませた奇妙な状態で目指す墓に着いた。白の墓石は一際目立っていた。掃除が行き届き、既に花が生けられている。燃え尽きた灰から白檀ではなくラベンダーの香りが仄かに立った。

墓前に供えられた菓子は干菓子や饅頭ではなく、袋に入ったままのジェリービーンズだった。

彼は手を合わせるでもなく、立っていた。小指をとられたままの僕も同じように立っていた。

東屋にたどり着いた僕は靴の中がちくちくするので脱いだ。靴の中には青青とした松の葉が一房入っていた。

どうしてこんな大きなものが入ったのだろう。

僕はその針のように尖った先を見つめ考えていた。靴の中にはもう何も入っていないはずなのに、ちくちくと痛んだ。

記憶の中の足裏の痛みが上がってきたかのように、僕は思わず胸元を掴んだ。この墓地には松林はないというのに。

裏庭、十四（ジェリービーンズ）

十四、ジェリービーンズ

彼はしばらくそうしていた。墓石に向かい語りかけているようでもあったし、ただその白さに目を奪われているようにも見えた。

夕日が落ちきり、宵闇が広がる。黒や紺は風景に同化し、白や灰色だけが浮いていた。

僕の巻いている薄墨色のストールが淡くひかり、それ以外は空気に沈む。空間に溶けていくような錯覚を覚える頃、彼が動いた。

指切りの形に絡んだままだった小指が解かれる。そして供えられたジェリービーンズの袋を掴んだ。

両手で目の高さまで上げた袋を、彼は勢いよく破った。

袋は真つ二つに裂ける。

色とりどりのジェリービーンズが踊るように散った。

ジェリービーンズは蛍光塗料を塗ったかのように発色していた。赤、青、緑、黄、と毒々しい色合いが宙を舞い、墓石、花台、砂利、そこかしこに落ちた。

怖い、と思った。

切り取られたたくさんのカラフルな小指。

短く弧を描く菓子にぞっとした。小さく膝が震えだし、この場から逃げたくなるがそれもできない。

そのとき、ふっと空気が動いた。背中に暖かな何かが当たり、膝裏を抱えられてからそれが彼の手のひらだと気づく。

僕は目の前の彼の肩にしがみつく。僕の体は宙に浮き、彼にだけ支えられている状態だった。

ゆっくりと揺れ、白の墓石が遠ざかる。散らばった小指が見えなくなり、僕はほっと息を吐いた。

薄墨色の客は言葉少なく、ただ僕たちは触れ合った。手のひらの暖かさだけが僕たちの間にあり、彼は指切りに絡んだ小指にキスをした。

何度も何度も。

裏庭、十五（再依頼）

十五、再依頼

ロッカーに入っていたストールを見て、どきりとした。薄水色。初めての仕事以来、彼に呼ばれたことはなかった。

迎えに来た案内役も以前と同じ、黒革靴が埃ひとつなく鈍く光っていた。スモークの貼られた車に揺られ、連れてこられた部屋もまた、あの薄水色の空間だった。

案内役の彼は前と同じ言葉を僕に言い含めた。僕は頷き、ベッドの傍らに寄せられた長椅子に腰を下ろす。クッションを移動させその中に身を沈めたところで彼は部屋を出た。

薄水色の客に再び呼ばれるとは思ってもみなかった。前回の夜、仕事途中で眠ってしまったのだから。報酬は受け取ったが、あれで依頼を全うしたとは考えてはいなかった。

そして、後ろめたさもあった。僕は薄水色の客の息を止めたいと少しでも考えた。今、自分の首に巻かれているこのストールで締めたいと、そう思ったのだから。

かおるこ、という人への分からず湧き出た嫉妬心は僕の中で、どろどろとしたジェリーのようなものになっていた。

そっと、薄水色の彼の手を取る。干からびた、しかし水気と体温の残る手を握る。握り返す力は無く、指先は鉤形に曲がったままだった。

それでも小さく脈打つ血管に触れれば、彼が生きていることが分かる。

僕はただ彼の手を握り続け、何も考えないように彼の脈拍だけを数える。

その夜、薄水色の客は目覚めることなく、かおるこ、と呟くこともなかった。

夜が更ける。以前のように窓は開け放たれ、中庭の木々が月明かりに映えていた。手入れの行き届いた、魅せるための庭は静かな中に虫の声を響かせている。

裏庭、十六（薄水色の庭）

十六、薄水色の底

十六夜月が南中し、薄水色の室内にゆうらりと影が踊った。

中庭の中央の前にはなかった水盆が置かれ、なみなみと注がれた水面が静かな風に揺れている。月光に反射されたそれが薄水色の壁や天井や床や、ソファやベッドシートや僕や薄水色の客に映っているのだった。

水紋は不規則に、濃淡を変えながら室内を埋めた。

薄水色の部屋は、月明かりの水に満たされている。

僕は水の中から庭で咲き誇る夜行花を見た。僕たちを満たす水を零し続ける月を見た。僕たちは宵闇に浮かぶあの水盆にいるに違いない。風が吹きかける息にくすぐったく身をよじると、合わせて水紋が笑う。

体の表面は冷え、握りしめた薄水色の客の手のひらが温かく、静かだった。

僕と薄水色の客を繋ぐ手のひらからたくさんの熱が伝わってきた。僕はその熱を奪った。そうしないと僕は水底で力尽きてしまっていただろう。

僕は自分が生きることには必死で。

僕は自分以外を守ることにはできない。

結局は。

月が沈み、夜明けの明かりに水が引いた。乾いた室内で僕は薄水色の客の、眠り続ける老人の胸に耳をあてた。薄水色の客の手のひらはすでに冷たい。

薄水色の客は目覚めなかった。

裏庭、十七（遠のくもの）

十七、遠のくもの

その死が何であつたのか何故だつたのか、分からないまま僕はマダムのブティックに戻つた。

ここまで送つてくれた案内役の彼の後ろ姿に、水底から浮上した後
の記憶の走馬灯が廻るのを思った。

日が上つてから現れた彼の足音だとか、有機質の冷たさだとか、手
を引かれここに連れられるまでの道のりだとか。

マダムの淹れてくれたコーヒーの薫りと仄かな蜂蜜の甘さが僕を落
ち着け、混乱する頭を覚ましたのはカフェインの効果かもしれない。
服を替え、いつもの自分に戻れば総ては夢のはなしだ。

その足で学校に向かう。サークル棟でシャワーを浴びるつもりだつ
た。

ここ何日か自宅アパートに帰らない日が続いている。アパートには
無職で昼から酒を呑む父親と世間体から家を出ることが出来ない母
親がいるからだ。笨な父親は酔つて暴力を振るうことはないが、父
親の享遊費を稼ぐために下手にまた売られるのも嫌だった。

講義で必要なものはロッカーにあり、替えの衣服も入っている。バ
イト代は仕事毎に手渡しでマダムから貰い、賠償金の口座に大方を
振り込み残りをアパートの郵便受けに突っ込む。幾らかの現金は僕
の生活費で抜いておいた。奨学金は別口座で置いてあるし、学費は
次の支払いまで間がある。

何とかなる。生きていける。

出来ることならこのままアパートには帰らず、過ごすつもりだった。

早い時間の講義室は誰も居ず、僕はテキストらを適当に置き、場所を取ると何とはなしに教壇に立った。

階段教室を下から見上げる教壇は、最も低い位置にあるのに最も高みから教えを垂れる。

しかし僕が立つとまるで階段状の席に座った一人一人から糾弾される被告人席に思えた。随分と昔に見た外国映画にそんなシーンがあったからかもしれない。

その糾弾を受け止めるために僕は目を閉じた。

僕を非難する陪審員たち。

（そうだ総ては僕の、）

「今日は休講になったんだけど」

近くで聞こえた現実の声に僕ははっと目を開ける。

「それとも、オマエが講義するわけ、」

ディバックを肩にかけた友人がそう言って口端を歪めた。

裏庭、十八（枯葉色の夢）／十九（友人）

十八、枯葉色の夢

俺は愛情の注ぎかたを知らない。愛情の育てかたも知らない。愛情を向けられた記憶が薄い。

十五で家を出たとき、両親に対する愛情はなかった。この父親が酒に溺れ死のうが、母親が暴力にあい死のうが、どうなってもよかった。

ただ、生まれたばかりの弟を見たとき、守らなければならないという感情が芽吹いた。おそらく、それが愛情なのだろうと思った。この存在を守るには自分しかいなく、同時に、自分は不必要だ。

そう思ったから。

けれど飢えている。

飢えていたのだ。

ことばの優しさ指先の優しさ柔らかさに似た放置無関心とは異なる距離感の心地よさ逃げ場所帰る場所抱き締める腕の温かさ抱き寄せた肩の薄さ触れる目に見えない壁。

許してくれるだろうか。

いや、許されなくていい。

ただその憎しみでも恨みでも羨望でも嫉妬でもなんでもいい、感情のベクトルを向けて欲しい。

離れた愛情はその大きさを増すばかりだった。

どうすればよいのだろう。
弟。

十九、友人

ぐにやりと歪んだ友人の顔がぐるんと回転し、視界から消えた。次に気が付いたとき、僕は知らない部屋の知らないソファに寝ていた。小さな音でテレビが付いていても静かな映画を映している。友人は僕の横たわるソファに寄りかかって映画に夢中だった。体を起こそうとしてめまいを感じ、諦めて友人の服を引く。何故だか口を開くのが億劫で話し掛けたくなかった。

「ああ、起きたか」

横目で僕を確認したがテレビから顔を逸らさず友人が言った。

「今いいところだから、ちょっと待つて。そろそろ終わるから」

いいところだ、という中身を確かめようとテレビを覗いたが、ぐるんと回った視界に仕方なく目を閉じる。

どれくらいそうしていたのか、眠っていたわけではないと思うがひ

んやりとしたものが押し付けられるまで、友人が動いたことに気づかなかった。

「飲むか、」

表面に汗をかいたペットボトルが頬に当たっている。起こせ、というつもりで手を伸ばした。それを叩き落とされる。

「寝てる。動くとまた貧血おこす」

そうして蓋を切ったボトルを口に押しつけられた不安定な状態で含み飲み下した。冷たく喉を伝う水が心地良く染みていく。

「零してもいい。ただの水だから。ったく、こういう生活してるわけ」

貧血、か。食べるものは食べていたと思っていたが、栄養素が足りていなかったのだろうか。

「あのバイト、金だけはいいはずだろ。睡眠不足は仕方ないとしても、オマエ、まともな生活してるようには見えない。どこに金消えてんだ」

「生活費」

「だったら倒れねえよ。明らかにエンゲル係数低いだろ。ギャンブルかオンナに貢いでる奴でももつとまともだ。少なくとも、宿なしにはならねえ」

「…気づいて、」

「長い付き合いだからな」

浮遊感、いや、エレベーターの落下感に似た、あの胃のせり上がる
感じに水を飲み込む。

「やめちまえ」

「え、」

「カネ、代わりに払う必要ねえよ。連帯責任なんて発生しないだろ。
誰もオマエまで巻き込んでいいなんて言ってない。児童相談所でも
警察でもどこでも行つて、何とかしてもらえよ。オマエが背負うメ
リットなんて無いだろ。それとも、俺に何とかさせたい？」

たたみかけて言われ返すことばもない僕に、悪友はとどめを刺した。

「俺を頼れ。何とでもしてやるから」

裏庭、二十（流れ）

二十、流れ

どうせなら脱衣麻雀をやろう、と言い出したのは誰かは聞かなかったが、四人とも異論はなかったのだろう。そもそも麻雀も仲間内の恒例の遊びだったし、犯罪すれの危ない遊びならこれまでも何度かしていたらしい。

男同士の脱衣麻雀だから、全裸にまでなるつもりもなかった。やり慣れた遊びに適度の緊張感を、という暗黙の了解があり、誰かが負けが込んだらやめるつもりだったらしい。

最初に負けたのは友人で、次に負けたのも彼だった。流れが全く彼になかったのだろう、残りの面子は上着や帽子を脱いだくらいで友人だけは上半身裸だった。とうに靴下まで脱いでいたので、ジーンズのベルトを外したら終わりになるだろう、三人が三人ともそう考えていた。

ところがその局面で場の流れが一新する。あれよあれよという間に彼の手が上がり、気が付いたらボクサーブリーフ一枚、対面にいた仲間が振り込み、そこではっと正気づいたように両手を上げて降参の意を示して終局したらしい。もちろん、友人はジーンズのベルトすら抜いていなかった。

僕が付き合わされた競馬場でも最初友人は負け続けた。かすりもせずことごとく外し、何が面白いのかわからない僕は余分な動作などなく疾走する競走馬の走りをただ見ていた。

最終レースの手前くらいでようやく友人はひとつ当てた。それでも明らかに負けたほうが多く、最終レースにも期待はしていなかった。

しかし、そのレースで彼は負け分を取り返し、夕食を奢ってくれ
くらいの勝ちを稼いだ。

悪友である彼はそういう人物だ。

最後の最後、危なくなったら本気を出す。運を掴む。流れを寄せる。
それまでは端から見てもやる気がないかのように欲がない。暇
を潰す遊びは好きだが本気にはならない。それは自分に対しても他
人に対しても同じだ。

だとしたら、彼にとって僕の今はそれ程までに崖っぷちなだろう。

「僕は、そんなに危ない？」

「ああ」

即答され苦笑いした。

「きみには言われたくないと思ってた」

「もっと賢いと思ってたよ」

「よくわからないな」

「自覚してないだけだろ」

自覚？

「きみにはわからないよ」

「わかりたくもないけど、な」

「…じゃあ、ほっといて」

彼の手のひらが僕の目元を覆い、視界が遮られた。冷たい手のひらに僕は熱を出していることに気づく。手足の指先は眠ってしまったかのように感覚が消えているのに。

「出来るもんならして」

いや、してた、か。彼が低く呟いた。

裏庭、二十一（溺れる）

二十一、溺れる

「気づけ。オマエ、溺れてんだよ」

友人は言い、僕は声を張り上げた。

「違う！」

吐き出した否定と唾が飛び、友人は顔をしかめる。袖先で拭くと僕の首に手をかけてきた。

僕の視界を遮っていた長い指が易々と回り、親指と人差し指の又で喉を圧される。

「死ぬか、」

ぐつと力が入り圧迫される。顎をそらし気道を確保しようとしたがそれよりも彼の力が勝った。

「死ねば悩みもなくなるぜ。」

事件になればオマエの親も公の監視下だ、早々に処分されるだろう」

首を締めつけ続ける友人の腕に爪を立てるが、彼の力は弱まらない。コイツは、何をしようとしているんだ？

「死ねよ」

僕を、殺そうと、

「苦学生なら同情呼べるぜ。俺の金を慰謝料ってことでオマエに渡してやる。大学の保険も少ねえけどあるから、慰謝料もそれでなんとか引いてくれるだろ。」

死ねよ、俺が殺してやる」

酸素不足になった頭がガンガンと警告を鳴らす。血液が違う違うと叫びながら全身を巡る。涙も鼻水も唾液も汗も僕から離れていく。煩い煩い煩い煩い煩い煩い！

僕は霞んだ視界の中、冷たく感覚の失せていた足を蹴り上げた。

急所には入らなかったが一瞬力が弛む。その隙に大きく息を吸い込み、反動のまま頭突きする。

「ぐ、」

鼻を押さえた友人から距離をとる。ぼたりと血が彼の首に伝うのを見たが、それよりも先に空気を取り込んだ。肺が悲鳴を上げ、きしきしと痛む。

「…オマエ、」

何度も呼吸を整え、ようやく彼に向き直る。悲しそうな目をする友人に、言った。

「きみが背負ったところで変わらない」

僕を殺し全てを受け止めたところでこの状況は解決しない。
新しい負を生むだけだ。

「僕が死んだとしても変わらないんだ」

命を絶つことで幸せになるのならばとづくに僕はここにいない。

僕たち家族（ああ、血の繋がりだけを家族と呼ばなくてはならない）
は勝手に溺れ、助けようとしてくれる人たちを巻き込み、巻き添え、
溺れ続けてしかし死ぬことはないのだ。

「…きみまで溺れることはない」

顔半分が血塗れた男と涙も鼻水も垂れ流した男が無言で見つめ合う。
馬鹿らしい修羅場だった。

「溺れてることぐらい知ってた」

「……」

「知ってたよ」

「だから」

「きみは手を差し伸べてくれる必要はないんだ。縋ったら誰も救わ
れない」

熱が僕の全身に回ろうとしている。

僕が正しくないことも結局何処へも行けないことも知っていた。
霞む視界は晴れることなくぐらぐらと揺れる。渴く喉から一言だけ
搾り出す。友人に伝えたいのは望むのはたった一つだから。

「だから、遠くから見守って居てくれないか」

我が儘な願いを最後に意識は途切れた。

裏庭、二十二（海松色の客）

二十二、海松色の客

「遅い」

からくり時計の下に立った僕を待ち受けていたのはノースリーブの濃紺のハーフネックニットを着、ブラックジーンズを合わせた少年だった。

色白の腕を惜しげなく晒し、一目で安物でないとわかるシルバーアクセを嫌みではない程度に付けている。

「すみません、」

僕は遅れた訳ではないが謝罪する。客を待たせたのはこちらだから。海松色のストールを用意した客に指定されたのは、パイピングは施されているもののほぼ黒無地の上下だった。幅太のベルトは大きくウエストではまらなかった為に腰に巻いてある。キャスケット帽を被るよう言われ、目深にしていた。

「ふうん、」

海松色の客は頭のとっぺんから靴先まで何度も視線を往復させる。僕よりも明らかに年若で背も低い彼に品定めをされるのは不快ではあるのだけれど、これが仕事だ。

僕はキャスケットを被り直し客の少年を見返した。

「マダムは売れ筋だと言つてたけど外見は極普通だね」

少年でも場数を踏み買い慣れた客なのだ、と僕は思い知った。未だ新人の域を出ない僕の客はマダムの店の常連である。例外なくこの少年も幾晩もの夜を買つて来たのだ。そのことに眉をしかめてしまった。

「うん、【裏庭】には珍しいタイプだ」

「裏庭？」

聞き慣れない単語を訊ね返す。

「知らないの？ マダムの店の名前じゃないか」

「マダムの…？ ブティックは確か【GARDEN】でしょう？」

「それは表の名さ。何だ、何にも知らないんだ」

ふうん、と再び少年は品定め目の目をして僕を見た。この仕事を紹介してくれた友人からは内容しか説明されず、マダムとも多くの会話をしたことはない。

今までの客ともそうだ。一晩中話続けたことはあつても店の話題になつたことはない。非合法のものだから自然避けていたらしい。しかしこの少年は触れられないところに触れてくる。

「うん、気に入った」

「は？」

「駄目な花なら返そうと思ってたんだ。なかなかに楽しめそうだ」

行くよ、と海松色の客は僕の手を引き歩き出した。

僕は幾分面食らい、しかし直ぐにこういう仕事だと思い出した。

裏庭、二十三（衝動と理性）

二十三、衝動と理性

セクシャルな衝動とどう闘うか。

僕と同級の男にとってそれは至上命題だろう。なにせ、道行くオナガが視界の端を横切ったことですら揺り動かされる。突き動かしたいと思う。

下腹の裏から内臓をせり上げるような衝動。

この音楽はそれに似ていた。

「なら、歓声は理性だな」

楽器音も歌声も掻き消さんばかりの叫び声に海松色の彼は呟いた。ライブハウスというものは連れてこられたのは初めてではない。しかし、以前友人たちと来た際に演っていたのはありがちなポップスとバラードだった。

これは違う。

背にした壁から伝わる振動が脳幹をゆすぶる。空間に濃くのびる音、突き刺す声と言葉。

「この音楽をどう思う、」

問われ、感じたままに答えれば彼は言った。
理性。

「歓声が理性。つまり、観客が理性？」

「そう、叫び声をあげることで犯されないように頑張っているんじゃないの」

そうかもしれない。黙ってこの音楽を受け入れたら、浸食されてしまっただろう。

「じゃあ、演奏者は露出狂ですね」

それに彼はぶつ、と笑い、僕の腕を引いた。出よう、と外へ促す。僕は逆らわず従った。

「俺はね、痴漢だと思ったよ」

「え？」

「あの音楽。自己中心的なんだ。好きなように演っているからこちらには迷惑だと思えない。触られたって気持ちいいもんじゃない」

「嫌いなんですか？」

「うん。君はそうでもなさそうだね」

「よくわかりません」

正直なところ、好きも嫌いもない。ただ連れてこられたライブハウスで演っていたただのアマチュアバンドだ。セミプロかもしれないが。

「どちらにせよ、もう聴くことはない音楽ですから」

あまり音楽を好きではない僕だが、あんなにあからさまな音楽は否定するに十分に足る理由づけをすることができる。あれに歓声をあげる人の気がしれなかった。

「セクシャルな衝動なのに、無視できるわけ？」

「音楽のはなしでしょう？」

「君がそう言ったんだよ。しかも、理性の対抗も無かっただろう」とん、と指で喉をつかれる。

「叫び声をあげるべきでしたか」

「うん。少なくとも、俺は初めて聴いたときに助けを求めたね」
表情を変えることなく僕の隣で聴いていた彼の言葉とは思えない。

「あなたは、衝動を否定するんですね」

「ああ、そうかもね」

「僕は痴漢を見てみぬふりを決め込むタイプです」
巻き込まれたくないから、と濁す。

「そうかな、君はどちらかというと、」

続く言葉は聞かなかったことにした。

裏庭、二十四（音楽たち）

二十四、音楽たち

海松色の客は頻繁に僕を指名し、小さなライブハウスへと誘った。音楽のジャンルは様々で、あるバンドのファンたちが集ったコピーだけのものや、全くのオリジナルのみのライブもあり、パンク、ロック、ヘビーメタルにデスメタルから、ジャズ、ポップスもクラシックも、和楽器に多国籍な民族楽器のライブもあった。声楽もあれば全くのインストウメンタルもある。日によっていくつかのライブを梯子した。

彼はその時折のジャンルに合った服装を指定し、決まって最後尾で壁にもたれ、振動と共に音楽に聴き入り、最後を聴かずライブハウスを出る。そして僕に感想を尋ねるのだ。

「この音楽をどう思う」

僕は思ったままを伝え、いちいち彼はその答えを面白がった。

この客は何故音楽を渡り歩くのだろう。

無節操な音楽好きでも、好みのジャンルはあるはずであり、苦手とするジャンルもあるはずである。しかし彼は歓喜や困惑の色を見せず、ただ音楽を聴いていた。初めて聴く音楽たちではないらしく、僕に感想を訊いた後、自分の感想を話す際に必ず、僕が最初に聴いたとき、というフレーズを使うのだった。

「音楽が好きなのですか、」

そう訊ねた僕に海松色の彼は不思議そうな顔をして訊き返してきた。

「音楽が好きでなければ、音楽を聴く資格がないわけではないだろう?。」

自分は音楽が好きなのではないと言外に含まされ、しかしその言い方に彼は音楽を嫌いではないことは確信した。

ではどうして、という問いを重ねることはできなかったが。

ライブハウス巡りをし、軽い食事を伴にする。謎かけのような会話と時折見せられる幼さに、僕は夜遊びを覚えたような感覚を味わっていた。

そんな海松色の客との夜【裏庭】の仕事の大半を占めていたころ、再び指名を受けた。

朱鷺色の客だった。

裏庭、二十五（好まざるとも）

二十五、好まざるとも

前回とは異なり、薄地になったブラックスーツをあてがわれた。開襟シャツではなく喉元までボタンを締めボウタイを結ぶ。銀系が縦横に織り込まれたベストまで着、姿見の自分はまるで七五三のようだった。

朱鷲色のストールにも朱色の濃いラインが何本か入っていた。前回もそうだったのかもしれないが、よく覚えていない。

服の仕様などには無頓着なたちだが、海松色の客との仕事を重ねるうち、細かなところに目が行くようになった。ブランドや生地、仕立てなどは未だに区別がつかないが、襟や袖、裾などの細かな刺繍や透かし、ボタンが気になった。

海松色の客は金色が好きらしい。パイピングが銀でも近くの膝リ糸は金糸が使われることが多かった。ビリジアンやクリムゾンも濃い色を好み、陰ではほぼ黒に見える。光があたると色を感じ、膝リ糸の金が浮かぶ。

朱鷲色のストールをよく見ると縦系に銀系が交じっていた。衣装をあてがうのはマダムなのだから、細かなところに統一感を出すのはマダムの趣味なのかもしれないが、朱鷲色の客が銀系を好きなのだと僕は思った。

からくり時計の下は待ち合わせの定番なのでいつも人がいる。僕と同じ【裏庭】の仕事をする人がいてもおかしくはないのだが、それ

らしき人に会ったことはない。合わないようになっているのだろう、
と思っっている。面識のある客と鉢合わせるのはあまり良い気がする
ものではない。顔色を変えない自信はあるが、不確かなものだ。
他の、少年だか少女だか、果ては老人かもしれない商品たちと横に
並びたくはない。

僕は身売りの商品だが、僕は僕でもあるのだ。

と、ぐいつと腕を引かれよろめいた。たたらをふみ進んだ先にいた
のは朱鷺色の客だった。前回と同じようなジーンズ姿の若い男、ス
ーツ姿の僕とはアンバランスだ。

何も言わず僕を、というかストールを確認し車に押し込んだ。運転
席に座る彼を隣から見ながら、客たちはからくり時計の待ち合わせ
を好んでいないのかもしれないと思った。

裏庭、二十六（黙する）

二十六、黙する

明治大正風の、と言えば分かるだろうか。造りは洋風、内装は和洋折衷、畳に直接漆に貝の椅子付き卓を置いている、そんな館だった。玄関ホールは広く、半円状の壁に沿って二階への階段がある。玄関ホール奥に鳥居形にくり貫いた入り口があり、そこがレストランになっっているらしかった。

レストランと言っても客席はいくつもない。衝立で仕切られたテーブルが数卓、中庭を挟んで向こう側には座卓があるらしい。各衝立には布がかかり、明かりが透けて人の気配がするものの、顔は見えない。給仕する男女が足音なく行き交い、時折衝立を抜ける際に足元が伺えるだけだ。

僕は先に案内され、壁際の一席に着いた。品書きは示されない。

また、どこかで着替えた朱鷺色の客が遅れて案内されてくる。灰色がかった三つ揃いのフォーマルスーツでタイは濃い朱色と、正装すれば学生には見えない。ともすれば粗雑に感じた印象はがらりと変わり、会社のひとつでも持っているように思える。

彼がそれなりの地位にいるのは間違いないだろう。この場所にしても【裏庭】からのバイト代を鑑みても、一般的な収入で利用できるようなところではない。

本格的なコース料理ではない給仕は箸が使えるもので、彼は前回僕が打ち明けたことを覚えていたのかと訝った。料理は品数が多いが

ひとつひとつは小さく、腹を満たすというより視覚を楽しませることを念頭に置いているようだった。僕には十分なくらいだが、前回のコースをしつかり平らげた彼には足りないだろうと思う。

その日の料理で印象的だったのは水だった。水を頼むと給仕たちはその足で庭に出、湧き水らしい吹き出し口から汲んでくる。朱鷺色の客の冷酒も湧き水に満たされ供された。

こそばゆく感じる別席の囁き声が何時までも途切れなかった。僕と朱鷺色の客はひとつも言葉を交わさずにいたが、それを嫌だとは思わなかった。むしろ、心地良いような、そんな沈黙だった。

時間をかけた食事が続く。いつの間にか月明かりが中庭に差し込み、反射した水面が手元で揺れた。照明は初めから絞られ、各卓には覆いのかけられた蝋燭が置かれている。ふたつの明かりが揺れるにつれ僕はあの夜を思い出していた。

十六夜月の水に満たされた、薄水色の夜、静かな死だった。

裏庭、二十七（揺れて揺られて）

二十七、揺れて揺られて

ゆらり、蠟燭が揺れる。僕は目を閉じた。接客中にそんなことをするのは初めてだったが、僕と彼との間におかれた沈黙は、それを許した。

薄水色の夜を思い浮かべる。月明かりが満たしたあの部屋、ベッド、横たわる薄水色の客。

繋いだ手のひらの乾き、抱き締めてきた弱々しい腕、枯れ木のような首：それらが感触とともに蘇り、僕の感情を揺らした。

「…きみ、」

朱鷺色の客が低く呟き、僕ははっと目を開けた。視界が揺れ、何か温かいものが目尻を拭う。彼の指だ、と考え至るまでに時間がかかった。指先が拭ったものが、僕の涙だということには更に時間を要した。

穏やかな風が入り、張られた薄布が揺れた。あの夜は空気は動かなかった、そう思うと涙が次々に浮かんできた。

僕は声を出さずに泣いていた。息遣いだけが荒くなり、うまく呼吸ができない。しゃくりあげそうになった時、朱鷺色の客が立ち上がった。

ばさり、僕の頭に朱鷺色の客は上着をかける。ひく、っと息を飲ん

だ僕の腕を掴み何も言わずに出口へ向かう。

引っ張られる格好となった僕は慌てて着いていくが、視界が狭まっている上、足がもつれる。倒れる、そう思ったとき身体が浮いた。

「…わっ、」

抱えあげられた、…というより持ち上げられた僕は、腹部に圧迫を感じた。肩にかつがれ運ばれている。朱鷺色の客の上着がずり落ちそうになり、慌てて掴む。

足を踏み出されるたびに揺れる。薄水色の客とは異なる大きな揺れに、僕は思わずしがみついていた。

朱鷺色の客は何も問わず、ただ、僕は揺られている。
夜が更け、朝になるまで。

裏庭、二十七（侵蝕）

二十八、侵蝕

朱鷺色の客の指名が続いた。あの夜、薄水色の死に揺れ、朱鷺色の沈黙に揺られた夜から、二日とおかずに指名が入る。今までの客たちのなかで連続して指名してきたのは海松色の客ぐらいだったから、拭えない違和感を抱えながらも「裏庭」の仕事をした。

海松色の客であれば解る。歳が近く、「客」というよりは夜遊びの相手のようであつたからだ。ただ音楽を聴きにハコを巡るのではなく、フォーマルに近い装いをし、食事と夜を共にする日々は、自分がいかに「墮ちて」いるのかを思い知らされる。報酬がはずむにつれ、僕は少しずつだが確実に、蝕まれているような気がしていた。だが、いったい誰に？

悪友は言う。

「手の届く範囲に助けがあるのに、どうして求めない」

僕は答える。

「泥沼が底なしかもしれないのに、どうして手を取れる？」

悪友が言う。

「巻き込まれもいいと本人がいつてるんだ」

僕は答える。

「巻き込みたくないよ、本人がいつているんだよ」

僕たちの会話は平行線をたどり、悪友は舌打ちをする。このバイトを紹介したのは彼なのに、最近では頻りに足を洗わせようとする。「裏庭」と彼がどのような関係にあるのかわからないまま僕は仕事を続けていた。

マダムは相変わらず仕事前に珈琲を淹れてくれ、衣装を揃えてくれる。彼女のブティックが繁盛しているのかは聞いたことがない。店舗名は【GARDEN】、しかしこの仕事は「裏庭」と呼ばれているらしい。海松色の客に聞いたその話の真偽すら僕は確かめていない。

からくり時計の下には待ち合わせの人々が集う。ストールを巻く人は少なかったけれども、僕だけというわけでもなかった。その中に「裏庭」の働き手は何人いるのだろうか。複数の僕のような人間が働いているはずだったが、自分以外のそれらしい人物を見分けられたことはない。朱鷺色のストールはとも目立つのだけれど、誰か他の人がそれを巻いているところを見かけたことはなかった。

朱鷺色のストールは回を重ねる毎に朱みを増していくように思う。縦糸に鮮やかな朱が混じるのに気付いたからだ。

ストールの意味もマダムに聞いたことはない。悪友である彼にも。僕は疑問を胸のなかでかみ殺す。だけれども疑問は消えず屍をいつまでもさらしている。

ゆっくりと、蝕まれていく。

裏庭、二十八（音楽と恋）

二十九、音楽と恋

音楽は涙を流していた。

だけれども音楽は泣いていることに気づいていなかった。

「そして君は泣いていることに気づきながら、ハンカチを手渡すことをしない」

海松色の客が言ったことを僕は否定しなかった。音楽は恋を歌う。

愛しい人への想いを温かなことばに乗せていた。

しかし、音楽はその恋を拒絶していた。

「きつと、音楽には諦めきれない恋があるんでしょう」

やさしい女声が語る音楽を、どう思つかを訊かれ、感じたままを答えた。この音楽が聴衆を揺さぶるとしたら、春のような恋心ではなく、その裏にある切ないまでのさびしさだろう。

久しぶりの海松色の客の指名に、連れてこられたのはコンサートホールだった。僕でも知っている名の知れた歌手のライブ、最後尾の席に座り、僕たちは手を繋いでいた。他の客たちは総立ちといってもよい状況で、音楽に身を委ねることもせずに座っている僕たちは明らかに浮いていたが、海松色の客にかけるように指示された薄く色の入った眼鏡と、白のシャツに黒のジレ、タイトな紺のスカートという装いが、僕にハンディがあるのではと思わせているようだった。海松色の客は仕立てのいいスラックスにシャツという格好でも

ある。僕をこの席へエスコートするにも肩を掴み誘導したし、話しかけるときは僕の手を握り、耳元へ寄せた。

何かを演じているような彼の振る舞いに僕は戸惑いを隠せなかったが、それも見えない不安からくる慣れない場所への緊張だと周囲の人には思えたらしい。席を立つときもホールを出るときもさりげなく道が空けられ、気遣うような空気を感じた。それに僕は後ろめたさを感じながら、海松色の客の彼に身を委ねる。

「諦めきれない恋がわかるなら、君にも諦めきれない恋があるというのかな」

食事にと連れてこられたレストランで彼は迷うことなく注文をし、僕に音楽の続きを問う。僕を「君」と呼ぶ彼は年下であるのに、雰囲気に合わせて言葉づかいが大人っぽさを出す。おそらく海松色の客はこのような場所に慣れているのだろう。「裏庭」に通う背景を考えれば至極当然のことだったが、何故だかとても哀しく思えた。

「僕は恋をしたことはありません」

そう、答えるだけで精一杯だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1197f/>

裏庭

2011年9月10日22時00分発行